

調 査 報 告 書

令和8年5月28日

袖ヶ浦市議会議長 小国 勇 様

文教福祉常任委員会
委員長 佐藤 博文

会議規則第106条の規定による調査のため、視察したところ、概要は下記のとおりでしたので、報告いたします。

記

- 1 期 日 令和8年5月14日（木）～15日（金）
- 2 場所・目的
 - (1) 第1日目 白石きぼう学園
学びの多様化学校、白石きぼう学園への視察
・多様な学びの価値観と子ども中心の居場所づくりについて
 - (2) 第2日目 宮城県岩沼市
高齢者支援と地域の絆づくりについて
- 3 参 加 者 8人（文教福祉常任委員6人、執行部1人、事務局1人）
- 4 概 要 別紙のとおり

視 察 概 要

1 白石きぼう学園「学びの多様化学校、白石きぼう学園への視察」

挨拶	白石市議会	松野 久郎 議長
	白石きぼう学園	星 健太郎 校長
説明者	学校管理課	石田 康之 教育専門監
	議会事務局	佐藤 哲生 局長

(1) 視察先概要

白石市は、宮城県南部に位置し、南は福島県に接する自然豊かな城下町である。人口約3万1千人、面積286.48 km²。市域には蔵王連峰や白石川が広がり、四季折々の自然景観に恵まれている。歴史的には、片倉氏の城下町として発展し、市内には「白石城」をはじめとした歴史・文化資源が残されている。また、伝統産業である「白石和紙」や特産品「白石温麺（うーめん）」でも知られている。

産業面では、電子部品関連を中心とした製造業が立地するほか、農業では米や野菜栽培が行われている。豊かな自然環境と歴史文化が調和した地域として、観光や地域振興にも力を入れている。

(2) 視察内容

1. 学びの多様化学校「白石きぼう学園」設置の背景

「白石きぼう学園」は、不登校児童生徒が安心して学べる新たな学びの場として、令和5年4月に開校した東北初の小中一貫型「学びの多様化学校」である。

全国的に不登校児童生徒数が増加する中、国は「誰一人取り残されない学びの保障」を掲げ、学びの多様化学校の設置を推進した。白石市でも、不登校児童生徒への支援として、教育支援センターや適応指導教室、各学校での別室支援などに取り組んできたが、より柔軟で多様な学びの場が必要と判断した。

そこで「子どもたちが行ける、行きたくなる学校づくり」を目指し、市長と教育長が方向性を共有し、多様な学びの選択肢の一つとして「白石きぼう学園」を設置した。

2. 白石市における不登校支援体制

白石市では、教育支援センターが不登校支援の中心的役割を担っている。

既存の支援体制として、

- 各学校での別室登校
- 家庭訪問
- 適応指導教室「仙南けやき教室」

などを実施しており、教育支援センターがそれぞれをつなぐハブ機能を果たしている。
また「白石きぼう学園」への入学相談窓口も教育支援センターが担当し、児童生徒一人ひとりの状況把握やアセスメントを行っている。

3. 入学までの流れ

対象となる児童生徒は、

- ・ 白石市在住の小学校第1学年から中学校第3学年までの児童生徒
- ・ 不登校状態にある（病気や経済的理由を除き、年間30日以上欠席、または、保健室や相談室、けやき教室や教育支援センター等に通っている）
- ・ 本校へ登校しようとする意欲、興味・関心がある事。学びたい意思がある児童生徒としている。

希望者には学校見学や体験入学を複数回実施し、本人・保護者への聞き取りを重ねたうえで入学につなげている。なお、公立学校であるため、入学するには「転校（在籍異動）」という形になる。

4. 「白石きぼう学園」のコンセプトと特徴

①学校のコンセプト

白石きぼう学園では「学校らしくない学校」をコンセプトに掲げ、従来型の学校観にとらわれない運営を行っている。子供が足を向けたくなること「行けそう！」「楽しそう！」を大切にしている。

②「学校らしくない学校」の主な特徴

- ・ 校歌・校章なし
- ・ 制服なし
- ・ 行事は入学式・卒業式のみ
- ・ 子どもの意見を重視
- ・ 自己選択・自己決定を尊重
- ・ 子ども主体の学校運営

子どもたちの提案により、令和6年度、7年度に修学旅行を実施した。

5. 教育活動の特色

①自分のペースを尊重した支援

起立性調節障害等にも配慮し、登校時間を柔軟に設定している。また、授業中に気持ちを落ち着かせるための「クールダウン」を認め、校内に複数の専用スペースを設置。児童生徒の自主申告により利用し、支援員が寄り添いながら対応している。

②「白石タイム」による学び直し

特別教育課程として「白石タイム」を設置し、不登校期間中に理解が難しくなった学

習内容を、一人ひとりの状況に応じて学び直している。教員との面談を通じて学習内容を決定し、先生が1対1で「分かるまで寄り添って教える」個別支援を行っている。

③「夢スタジオ」体験活動の機会

総合的な学習の時間として実施。児童生徒が自主的に体験したいことを選択する。地域との関わりや体験活動を重視し、人との関係性づくりや社会性の向上を図っている。

6. 児童生徒数と教職員体制

児童生徒数は年々増加傾向にある。

教職員は通常の教員定数に加え、加配教員3名を配置。

さらに、市費による支援員配置や、県費によるスクールカウンセラー配置回数の増加など、手厚い支援体制を構築している。

7. 子どもたちの変化

子どもたちからは、「授業がわかりやすい」、「認めてもらえる」、「人との関わりが楽しい」といった声が多く寄せられている。

学校側では、「子どもを主語にして考えること」が重要であると説明があった。

8. 学びの共有・情報発信

令和6年、7年、8年には、シンポジウムやフォーラムを開催し、学びの多様化学校の取組や教育手法について情報発信を行っている。

9. 白石みらい教育基金

- ・学校運営支援のため、「白石未来教育基金」を創設。
- ・企業版ふるさと納税の活用促進。

企業・団体・個人から寄付を受け、教育環境整備等に活用している。

これにより、市財政への負担軽減や他校運営への影響抑制を図っている。

10. 児童生徒の出席状況等について

児童生徒の出席率は概ね7割前後との説明があった。

学校だけでなく教育支援センターも併用する児童生徒もあり、それぞれに合った学び方を尊重しているとのことであった。

(3) 主な質疑応答

Q.「白石タイム」はどのような授業か。また、学力の高い子への対応はどうしているのか。

A.「白石タイム」は週4時間の学び直しの時間で、それ以外は通常授業を実施している。

授業時数は標準より少ないが、基礎学力保障を重視している。学力の高い児童生徒には、AIドリル等を活用した先取り学習や個別対応を行っている。

Q. クールダウンスペースの設置状況と利用状況について伺いたい。

A. 保健室脇や図書室、階段下など複数箇所をクールダウンスペースとして活用している。クールダウン中は支援員が付き添い、会話や見守りを行いながら、子どもたちは自ら時間を決めて教室へ戻っている。

Q. 定期テストや評定がない中で、進学指導はどのように行っているのか。

A. 定期テストや数値評定は行わず、通知表は全て記述式としている。高校進学時には副申書で子どもの成長や努力を伝え、学力だけでなく自己肯定感や社会性の育成を重視している。

Q. 児童生徒数増加への対応や定員の考え方について伺いたい。

A. 児童生徒数は年々増加しており、現在でも学校としては「ほぼ上限」に近い状況である。今後さらに増加した場合は、支援員や教員の増員が課題と認識している。

Q. 教職員配置や研修体制について伺いたい。

A. 教職員は通常の人事異動で配置しているが、特別支援教育経験者の配置を要望している。研修では「学校観の転換」を重視し、他自治体等との連携研修も実施している。

Q. 不登校児童生徒数減少の要因をどう分析しているか。

A. きぼう学園開校による新たな学びの場の整備が大きな要因と考えている。また、実地研修を通じた市内教職員の学びが各学校へ広がっていることも影響している。

Q. 紹介映像の中で、児童生徒が「勇気を出して来た」と話していた意味は何か。

A. 元の学校には行きづらい子どもたちが、「新しい環境へ踏み出す勇気」を持って挑戦しているという意味である。教育支援センターが面談を行い、状況に応じた学びの場を選択している。

Q. 通学方法について伺いたい。

A. 通学方法は自由で、スクールバス、保護者送迎、市民バス、自転車等を利用している。朝はスクールバスを運行し、帰りは市民バス（小中学生は無料）を利用している。

Q. これから同様の学校を設置する自治体へのアドバイスはあるか。

A. 市長・教育長の強い思いと、議会の理解・協力が重要である。また、既存校舎の活用

が非常に大きく、新設よりも整備しやすい。白石市では廃校施設を活用している。

Q. 小中一貫校とした理由は何か。

A. 小学校段階から不登校となる児童もいるため、中学校のみでは支援が不十分となる。小中一貫とすることで、より早い段階から支援できる体制を整えた。

Q. 施設面で「良かった点」や課題はあるか。

A. 畳スペースや空き教室など、柔軟に使える空間が効果的である。現状は概ね満足しているが、今後児童生徒数が増加した場合、クールダウンスペース確保が課題になる可能性がある。

(4) 感想

白石きぼう学園を視察し、不登校支援においては「子どもが安心して学べる居場所づくり」が重要であると強く感じた。白石市では、教育支援センターが中心となり、別室登校や適応指導教室などを連携させ、一人ひとりに応じた支援を実施していた。また、「学校らしくない学校」をコンセプトに、生徒たちによる自己選択・自己決定を尊重した学校運営を行い、子ども主体の教育を実践していた点が印象的であった。さらに、クールダウンスペースや個別学習支援など、安心して学べる環境整備も充実していた。本市においても、多様な学びを認め、不登校児童生徒が孤立しない支援体制の充実について研究していきたい。

上

(5) 視察風景 (写真)







別 紙

視 察 概 要

1 岩沼市役所

「高齢者支援と地域の絆づくりについて」

説明者	岩沼市介護福祉課	岩渕 倫子 課長
		清水 ひろみ 主幹
	三色吉シニアクラブ	青柳 信治 会長
		大村 晃一 顧問
	岩沼市議会	酒井 伸幸 議長
進 行	岩沼市議会事務局	沼田 輝明 事務局長、鈴木 琴美 係長
場 所	岩沼市役所	

(1) 視察先概要

県の南部、仙台市の南に位置し、古くは奥州街道の宿場町、日本三大稲荷の竹駒神社の門前町として発展。仙台市への通勤通学が多く、同市へのベッドタウンでもある。

面積 60.45 km²

人口 43,448 人

岩沼市議会の担当課および三色吉シニアクラブより、「高齢者支援と地域の絆づくりについて」説明を伺ったあと、質疑応答で詳細を確認した。

(2) 視察内容

1. 岩沼市の現状と課題

人口減少と高齢化が進行しており、令和 7 年推計で高齢化率は 28.3%となっている。要介護認定者数も増加傾向にあり、介護予防や元気な高齢者の活躍推進、認知症対策が重要となっている。

2. 主な高齢者支援事業

- ・健幸いきいき広場：市内 4 箇所の生活圏域で週 1 回開催。リハビリテーション専門職や健康運動指導士が参加者の状況を見ながら運動指導を行っており、非常に好評を得ている。
- ・常設型通いの場「集まれ」：市中心部で月 2 回程度開催。前半は軽運動、後半はミニ講話という構成で、高齢者が「今日行ってみようかな」と外出するきっかけづくりとなっている。

- ・お買い物ミニデイ事業：市内 2 箇所のスーパーで開催。軽運動や脳トレの後に店内での買い物と昼食を行う内容で、開始から 10 年が経過し、重度化防止効果が確認されている。
- ・短期集中予防サービス：リハビリ専門職の支援により、参加者の運動機能（深くしゃがめるようになる等）が改善し、自宅での転倒がなくなるなどの成果が出た。外に出て人と関わることによる精神面での変化も大きい。

3. 地域の絆づくりと元気な高齢者の活躍（三色吉シニアクラブの事例）

①組織の概要

- ・コロナ禍の令和 2 年 6 月に設立され、「まずは楽しく」「元気に生き年取ってやろう」を合言葉に活動している。
- ・現在の会員数は 30 名（男性 21 名、女性 9 名）で、男性の参加が多いのが特徴である。
- ・令和 4 年に「第 11 回 健康寿命をのばそう！アワード」の介護予防・高齢者生活支援分野において、厚生労働大臣最優秀賞を受賞した。

②主な活動内容

- ・地域貢献・資金調達：地元の金蛇水神社でのイベント「にぎわい市」の運営（テント設営、見守り、野菜販売等）を担い、出店料等の収益をクラブの活動資金に充てている。その他、公園の草刈りやゴミ集積所の塗装なども受託・実施している。
- ・見守り・生活支援：包括支援センターや民生委員からの情報提供をもとに、一人暮らしの高齢者等への訪問見守り（赤いビブスを着用し週 1 回実施）や、ゴミ出し支援を行っている。活動状況は LINE グループで共有している。
- ・多世代交流：子ども会の廃品回収への協力や凧作り・凧揚げ、ボッチャ大会などを通じて子どもたちと交流。さらに、町内会の青年部等も含めた「三色吉地域交流会」を立ち上げ、多世代が参加する「スマイルカフェ」などを開催している

（3）感想

市の事業の中でも、お買い物ミニデイ事業は特に高齢者の買物支援も兼ねることができながら健康増進につながる効果的な事業であると感じた。委託事業者は本市でも体育施設管理で実績のある事業者であり、参考にしやすい事業である。三色吉シニアクラブの取り組みは高齢者による極めて自立性の高い活動であり、なかなか例を見ない。シニアクラブではないが本市のまちづくり協議会で近しい活動があり、参考になるのではないかなと思う。

(4) 主な質疑応答

- Q. 三色吉シニアクラブに男性が多く参加していることや、多世代交流を進める上での工夫は？
- A. 子ども会の廃品回収への協力などから関係性を築き、子ども会の役員が代わってもお互いに相談し合えるようにしている。また、連絡事項や写真の共有にはLINE グループを活用し、会議を減らして事務負担の軽減や活動の振り返りに役立てている。
- Q. 「健幸いきいき広場」と「常設型通いの場」の予算や運営体制の違いは？
- A. 「健幸いきいき広場」は専門職を活用した委託事業で、1箇所あたり100万円弱（計約500～600万円）の予算で実施し、参加者から1割の負担金を頂いている。一方、「常設型通いの場」は介護福祉課と健康増進課の職員が自前で企画・運営しており、講師への謝礼程度で予算を抑えつつ実施している。
- Q. 「お買い物ミニデイ事業」等における高齢者の移動（足）の確保はどのようにしているか？
- A. お買い物ミニデイの送迎は、シルバー人材センターに市の公用車を運転してもらう方法と、タクシー業者をお願いする方法があり、参加者に合わせて職員が毎回ルートを組み合わせている。市全体の課題としては、中心部のイベントには市民バスやデマンドタクシー、AI タクシーを利用できる場所を設定しているが、よりきめ細かな移動支援については他部署との連携も含めた課題となっている。

(5) 視察風景（写真）



